

# 研究奨励交付金（COC研究）

## 報 告 書

令和4年度採択分

令和5年5月31日作成

研究課題名（和文）炭鉱閉山による児童の問題から引揚孤児問題へ — 福岡県を中心に  
研究課題名（英文）From the issue of children due to the closure of coal mines to the issue of repatriated orphans - with a focus on Fukuoka Prefecture.

### 研究代表者

氏 名 鬼塚 香  
福岡県立大学 人間社会学部・准教授（現在は異動により駒沢大学文学部）

### 研究組織

氏 名	所属研究機関・部局・職	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）
佐野麻由子	人間社会学部・教授	引揚孤児関係資料の分析検討、引揚孤児に関する学術交流会の開催企画
杉野寿子	人間社会学部・教授	同上
陸 麗君	人間社会学部・准教授	同上
鬼塚 香	人間社会学部・准教授	引揚孤児関係資料の収集

### 研究奨励交付金（配分額）

906,000円

### 研究成果の概要（当該研究期間のまとめ、できるだけ分かりやすく記述すること。）

関係資料の収集から現段階で福岡県を中心とする引揚孤児救済のおおまかな経緯が分かってきた。満州からの引揚孤児は1946年6月頃からである。引揚孤児の一時保護施設として百道松風園が開設されたのは1946年7月であった。病児のための引揚孤児施設として聖福寮が開設されたのは同年8月であった。ほとんどの引揚孤児は親族に引き取られていくが、1か月以上引き取り手が見つからない場合には和白青松園（1946年6月開設）に移送された。百道松風園が引揚孤児の一時保護施設として機能したのは1946年11月までであった。同年12月からは浮浪児保護施設になっていくのである。また、1946年9月に、長崎の大村子供の家が引揚孤児の一時保護施設として開設され、佐世保引揚基地からの引揚孤児を一時保護した。そのうち約30名が現在、東京八王子に本部を持つ同胞援護婦人連盟に移送されていることが判明した。

### 研究分野／キーワード

引揚孤児 百道松風園 和白青松園 大村子供の家 同胞援護婦人連盟

## 研究開始当初の背景

1946（昭和21）年7月に引揚孤児一時保護施設として開設された県営の百道松風園であるが、それが機能したのはわずか半年間であった。1946年12月になると浮浪児一時保護施設に転換されるのである。この変化は劇的でした。

戦後の児童救済史には二つの側面があった。一つの側面は戦争の犠牲者としての引揚孤児を含む戦災孤児への救済保護である。これはもっぱら自治体（福岡県など）と同胞援護会などに任されていたのである。戦災孤児は哀れみと同情の対象であった。もう一つの側面はしだいに深刻化する浮浪児の問題であり、浮浪児は救済保護の対象というよりは取り締まりの対象にされた、という事実である。百道松風園の記録を調べることで、引揚孤児救済から浮浪児保護への転換の推移やその意味合いを解明することができるだろう。

先行研究として、厚生省博多援護局による病児のための引揚孤児施設聖福寮（1946年年8月開設、140人程度を保護）については比較的よく知られており、近年になって沈黙の半世紀を経て、刊行されるようになった「戦争孤児」に関する証言集にしばしば取り上げられている。しかし、福岡県営の百道松風園については全くといってよいほど知られていないし、その実態についての先行研究は皆無の状態である。2003（平成15）年に県立の児童養護施設となっていた百道松風園が廃園となり、そこで保管されてきた引揚孤児に関する一次資料（約90点）が、現在、共同公文書館に保管されている。また、聖福寮に関する資料は現在福岡市が保管している。さらに和白青松園や大村子供の家にも引揚孤児に関する一次資料が保管されている。これら貴重な資料を調査研究することで、戦後史の空白を埋めることができ、その歴史的意義が大きいと考える。

戦後、「戦災孤児」と表現されたが、現在では「戦争孤児」として表現されるようになり、当事者による証言集が刊行されるようになった。ここには50年ないし70年の強い沈黙があったのである。なぜ、ここにきて、沈黙が打ち破られることになったのか、二つの要因が重なっている。一つは当事者が高齢となり、死を意識するようになり、「私は誰なのか」というアイデンティティの問いが鮮明に浮かび上がってきたこと、同時に証言を支援するサポート・コミュニティが登場してきたことである。福岡県内の例でいえば、1991（平成3）年頃発足した「引揚げ港・博多を考える集い」がある。アイデンティティ＝知ることへの権利は、それを支える個人なり集団があつてこそ機能化すると言わなければならない。

今回の百道松風園の記録などから引揚孤児救済の実態を解明しようとする試みは、こうしたサポート・コミュニティとの協働を志向する試みでもある。配偶者にさえ語らず、親族への配慮の故に沈黙しつづけることを決めている当事者がほとんどであるという事実は重く受け止めなくてはならない。戦災孤児、引揚孤児への周囲の偏見の目はなくなっていないからである。沈黙の歴史、歴史の空白を生んできたのは我々一人一人の、自由と民主主義をめぐる対話を避けてきた、いまだ避けている、という日常性の問題であろう。であればこそ、この問題に対峙することの意義は社会の発見と連帯への志向であり、創造なのだと思う。

## 2. 研究の目的

本共同研究は、COC研究「炭鉱閉山によるおける児童の保護から引揚孤児問題へ—福岡県を中心に—」の1年目である。「筑豊の子供を守る会」関係資料集成の第2回配本を実現し、関係者に配

布することができた。さらに、福岡県を中心に引揚孤児関係資料の収集を行い、その過程で、長崎県大村子供の家もまた、福岡県百道松風園と並んで、引揚孤児のための一時保護施設として開設されたことが判明した。さらに東京にある同胞援護婦人連盟が一時保護機能を果たしていたことも判明する結果となった。

2年目の本共同研究では、1年目の研究成果を踏まえ、戦後の児童福祉の原点とも言える引揚孤児の救済保護の実態を解明することを目的とする。博多港や佐世保港が日本最大の引揚基地であり、したがって引揚孤児の救済保護は、百道松風園、和白青松園、聖福寮など、福岡県を中心とすることになるのだが、それに加えて大村子供の家や同胞援護婦人連盟も調査対象を加えることとしたい。

本共同研究の最終的な目標は、引揚孤児資料集成、おそらくは20巻前後になると思われる資料集成を令和5（2023度）年度中に編集し、解説を書き上げ、令和6（2024）年6月にその刊行を実現させることである。

### 3. 研究の方法

引揚孤児とはほぼ満州からの引揚孤児である。博多の引揚基地ないし博多引揚援護局、佐世保の引揚基地ないし佐世保引揚援護局経由が大半、ということになる。各引揚援護局史には引揚孤児についての詳しい記載はない。引揚孤児の救済保護の経緯を知るためには、引揚孤児を一時保護した施設に所蔵された資料に当たるしか方法がない。そこで以下の方法により情報収集を行った。

#### 1) 百道松風園の引揚孤児関係資料

福岡県共同文書館に保管された百道松風園の引揚孤児関係資料について2022（令和4）年8月頃から、共同文書館に所蔵された百道松風園関係の引揚孤児関係資料について閲覧申請を行い、うち17件について閲覧し、主な内容を確認することができた。そして、その複写申請を行い、複写された資料を受け取り、さらに、細井、山本らで資料を共有すべく、2部の複写作業と製本を六花出版に依頼し、2023（令和5）年3月末までに完了することができた。なお、上記と同時期に共同文書館に対し、閲覧請求していた13件の資料については、ようやく2023（令和5）年3～4月から閲覧可能となったため、本研究2年目に閲覧と複写作業に入る予定である。

#### 2) 聖福寮などの引揚孤児関係資料

2022（令和4）年8月、福岡市ふくふくプラザを訪問し、聖福寮などの引揚孤児関係資料の所在と管理状態の確認を終えている。また、「引揚げ港・博多を考える集い」の事務局的な役割を担っている遠藤氏との情報交換も開始した。

#### 3) 和白青松園の引揚孤児関係資料

引揚孤児収容保護施設であった和白青松園が所蔵する引揚孤児に関する関係資料の渉猟は一応完了し、複写可能な冊子の複写を終えた。引揚孤児に関する一次資料は1件のみあった。その複写と進め方について協議中である。

#### 4) 大村子供の家の引揚孤児関係資料について

2022（令和4）年12月にJaPSCAN福岡大会で開催した自主シンポジウムにおいて、シンポジストとして大村子供の家の副施設長松本幸治氏に依頼した。これを機に、和白青松園と同様に大村子供の家も、戦後、同胞援護会の施設として引揚孤児救済を担っていたことを知った。そこで、2023（令

和5) 年2月に、児童養護施設大村子供の家を訪問し、引揚孤児に関する一次資料が7件あることを確認した。2023年4月には、一次資料の複写作業を行い、プライバシー保護のための伏字の作業に向け協議することになっている。

東京都八王子市にある同胞援護婦人連盟への訪問調査は2年目の計画で実施予定である。

#### **4. 研究の主な成果**

これまでの関係資料の収集の経過から以下のような引揚孤児救済のおおまかな経緯を知ることができた。引揚孤児とはほぼ満州からの引揚孤児であることが判明した。したがって福岡県こそが引揚孤児救済保護を中心に担ったことは間違いない。満州からの引揚孤児は1946年6月頃からである。引揚孤児の一時保護施設として百道松風園が開設されたのは1946（昭和21）年7月であった。同年8月には、病児のための引揚孤児施設として聖福寮が開設された。ほとんどの引揚孤児は親族に引き取られていくが、病児は聖福寮か病院に入院となり、また、1か月以上引き取り手が見つからない場合には和白青松園（1946年6月開設）に移送された。百道松風園が引揚孤児の一時保護施設として機能したのは1946年11月までであり、同年12月からは浮浪児保護施設になっていくのである。また、長崎の大村子供の家が引揚孤児の一時保護施設として開設されたのは1946年9月であり、佐世保引揚基地からの引揚孤児を一時保護した。そのうち約30名が現在、東京都八王子市に本部を持つ同胞援護婦人連盟に移送されていることが判明した。

今後は、同胞援護婦人連盟を訪問調査し、大村子供の家との関係など調査していく予定である。収集した資料の分析検討は今後の課題である。

#### **5. 主な発表論文等**

現在は資料収集の段階である。

#### **6. その他の研究費の獲得**

無し